

東南アジア初期金属器時代の銅鐘

川名 広文

1. はじめに

紀元前後の頃にあたる東南アジア大陸・半島部の初期金属器時代には、舌を具えない大型の青銅製の鐘（bronze bell）がみられる。

先に筆者は、マラヤ（半島マレーシア）はマラッカ海峡に通ずる主要河川域に偏在する、おもに鉄器時代に属する石棺墓を集成、検討したことがある [川名 2001]。その際に、葬墓の副葬品の一つとして、錫石採掘の鉞具とみる向きにつよい独特な形態を具えたソケット付長軸鉄斧がかなり普遍的に認められるだけでなく、南隣に位置する港市クラン近郊の遺跡では一括埋納品として他ならぬ銅鐘とも伴っていた可能性がある事情に接した。

そこで、銅鼓とならび広義ドンソン文化伝統の威信財として南方に拡散し、また楽器として諸種の祭儀に関与したと思われる銅鐘についての序説を試みたい。

なお、文図中に付記した①～⑦の番号は第3節以下に示す各事例に対応する。

2. 発見略史

英国によるマラヤの保護統治が着々と進められていた1905年頃、スランゴール州のクラン（Klang）近郊において鉄道敷設の工事に際して、青銅製の鐘3個が鉄矛1点、ソケット式鉄器3点と一緒に偶然の出土をみたことから始まる [Linehan 1951: 8 - 9]。遺跡の立地はマラッカ海峡に注ぐクラン河の河口近くにあたる。しかし、正確な出土地点や状況は不明である。その出土品のすべてが当初、スランゴール博物館に収蔵さ

れた。1905年、これら銅鐘のうちの1点(④)が伴出した鉄器の鋳型模型とともに、タイピンにあるペラ博物館に寄贈され、さらに後年クアラルンプル国立博物館に収蔵されるに至った。したがって、それはクラン＝ペラ博銅鐘(クラン Pk. と略記、以下同様)もしくはクラン＝クアラルンプル博銅鐘(クラン KL.)と呼ぶ。別の銅鐘1点は不運なことに、本来共伴していたとみられる鉄器とともに行方不明になっている。1905～12年にかけての事らしく、本稿ではクラン＝スランゴール博銅鐘と仮称する(クラン Sr.)。

3つ目の銅鐘(⑤)はロンドンにある大英博物館に寄贈されたのだが、まず自然史博物館に入り1938年になってようやく東洋古代部門に移管された経緯がある。そこで、当品はクラン＝大英博銅鐘(クラン Br.)と称される。

1903～08年にかけてスランゴール博物館の学芸員で、1908～26年には連合州博物館の館長であったH.C.ロビンソン(Robinson)は、1909年刊『マレー連合州博物館案内図録』のなかで、ペラ博物館所蔵の当該1点について、「奇異な鐘のかたちをした青銅製品は、ス



図1 銅鐘出土の参照遺跡位置図
 1. マッソン 2. ヴェトケ 3. サムロン 4・5. クラン
 6. カンポン＝ベンチュ 7. 大波那 8. 石寨山

ランゴールのクラン近くでみつかった3個のうちの1つで、それはたぶん仏教に関係し鐘として用いられたのだろう」と記している [Linehan 1951: 9]。

しばらくおいて、カンボジアのトンレサップ湖西方、バタンバン近郊から出土した銅鐘 (③) について、フランス極東学院考古主任の H. パマンティエは早くもベトナム北部ドンソン遺跡出土の青銅器の系統と関係づけた [Parmentier 1932: 177 - 78]。

そのドンソン遺跡において、1934～35年および1936～38年にフランス極東学院が主宰した第1～2次調査で出土した銅鐘 (①) について、スウェーデンの考古学者 O. ヤンセが大著『インドシナの考古調査』—全3巻—のなかでふれている [Janse 1947: xxi-iv]。ヤンセはこれを前漢初めに位置付けた。

そして1961年にベトナムのハイフォン省ヴェトケ (Viet Khe) 遺跡がベトナム歴史博物館 (ハノイ) によって発掘され、5基の木棺墓が検出された [Higham 1996: 111 - 14]。このヴェトケ古墓では副葬品として97個の青銅製品が認められ、銅鐘は大小4点を数える [ハヴァンタン 1991]。そのうちの大型1点が報告書に図示されている [Vien Bao Tang 1965]。

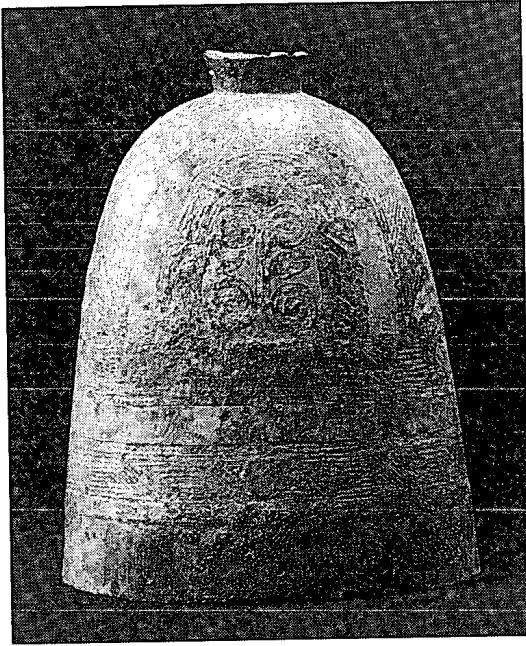
最近では1980年前後にマラヤ南部のジョホール州グリスク (Grisek) 近郊カンポン=ペンチュ (Pencu) において、1個のドンソン系銅鐘 (⑥) が発見された [Adi 1983: 61]。そこはマラッカ海峡に注ぐムアール河の中流域にあたる。ある村人が家を建てるため盛り土していた際にみつかった。150km 弱の距離を隔てるが、クラン出土の大英博銅鐘と瓜二つである。また、銅鐘に関わる理化学的年代測定としては初となる、熱ルミネセンス法による測定年代が本例で得られている。

3. 事例各説

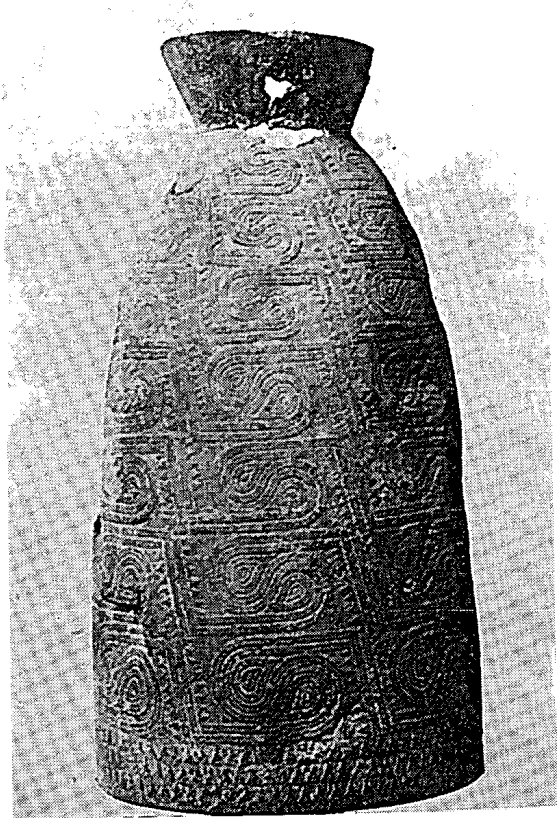
ベトナム、カンボジア、マラヤの地域順で管見にふれた6例の銅鐘について概説しておきたい。

①マッソン銅鐘 (図2、3)

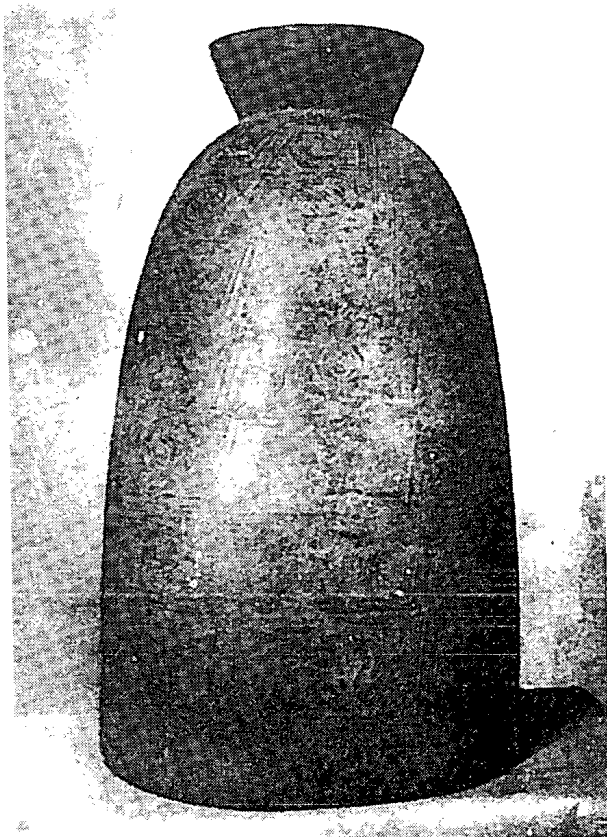
ベトナムのタインホア省タインホア、マッソン (Mat Son) から出土し



① マッソン銅鐘 (ベトナム)



⑤ クラン=大英博銅鐘 (マラヤ)



③ サムロン銅鐘 (カンボジア)



⑥ カンボン=ベンチュ銅鐘 (マラヤ)

図 2

東南アジア初期金属器時代の銅鐘

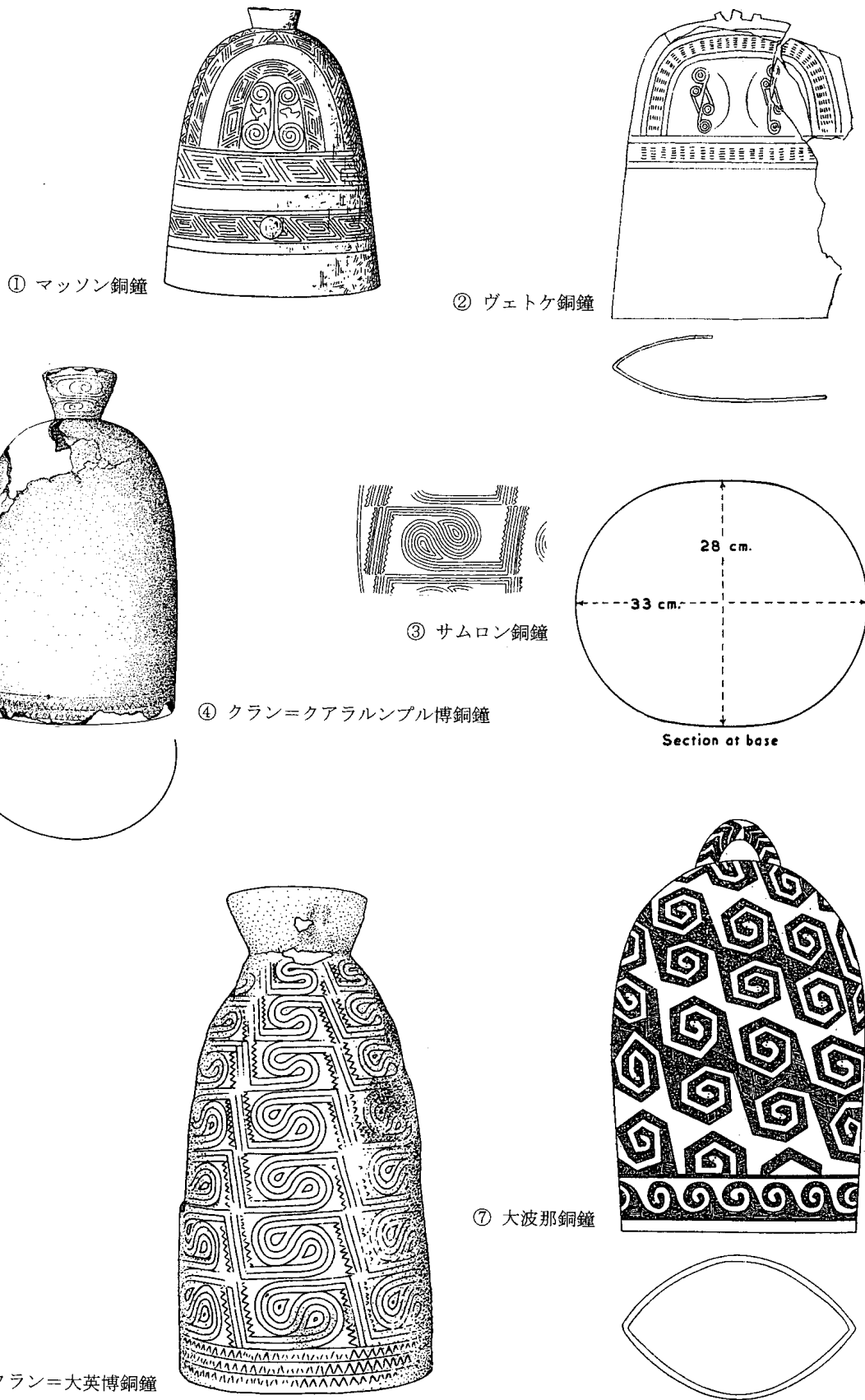


図3 銅鐘の実測図・概観図・意匠 (約 1 / 10)

た。高さ31.5cm、底径25.5cmを測る。前4～前3世紀の所産とされている。ハノイのベトナム国立歴史博物館所蔵 [Janse 1947: Fig 4、肥塚2001: 10]。肩部に沿って逆U字形に線文による文様帯を配し、無文帯を挟んで同様な文様帯を重ね、内部に二個一対の渦巻き連結文を対置させ、さらに鳥獣の意匠を添える。下半部には渦巻き状の平行四辺形の構図を横に連ねた文様帯を二段廻らし、あいだと下端に無文帯を設けてある。なお、下部の横位文様帯の正面に径3cm弱の無地の円座があるが、打ち鳴らすための撞座と目される。

②ヴェトケ銅鐘 (図3)

ベトナムのハイフォン省ヴェトケ遺跡の木棺墓から出土した。片側を一部欠損しており、現存高35cm、推定底径28cmを測る。頂部に幅4、5cmほどの釣り手を具えるが、一部欠失した。横断面は稜をもった扁平な卵形を呈する。上半部に逆U字形と横帯の文様区画を配し、そのなかに4個の同心円を接線で結んだような意匠文を二組並べ、あいだに弓形の線文を対置させている。これ以前に、大型の銅鐘の類例を二、三探すことができ、最初の良好な類品はタインホアのマッソン (上記①に該当) に知られる [Vien Bao Tang 1965: 24]。前3～前2世紀頃の所産とみられる。ベトナム国立歴史博物館所蔵。

③サムロン銅鐘 (図2)

カンボジアのバタンバン近郊のテュオル・テュマール＝サムロン (Tuol Thmar Samrong) から出土した。当初に「象の鐘」と命名された。高さ57.5cm、底の長径33cm、短径28cmを測る。器形は細長く、扁平な卵形の横断面を呈する。装飾は中央のZ字が反転してS字に拡がる斜線をもつ一連の要素からなる。それぞれの要素の形成は、まったく独立して完全であり、器面に応じ縮小していく。三要素が漸減しながら上下七段に及ぶ。ほぼ縦位の区画線には外側に一系列の鋸歯文が伴い、下端には別のより大きな四列の鋸歯文が形成される。真っ直ぐなその鋸歯文列の一部が継ぎ合わせの多少悪くなる母型 (スタンプ) で型付されていることが注意される。そして、その方式、鋸歯文の存在、およびS字Z字の意匠とラオス鼓^{*1}の器面装飾との類似性などを根拠に、ドンソン遺跡の

文物の系統と結びつけた [Parmentier 1932 : 177 - 78]。後述のクラン＝大英博銅鐘と酷似している。プノンペン国立博物館所蔵。

④クラン＝クアラルンプル博銅鐘 (図3)

マラヤはスランゴール州クラン近郊で出土した3個の銅鐘のうちの1つである。基底部を多少欠損している。現存高40.7cm、底径22.2cmを測る。装飾としては、頸部にかすかな二段の渦巻き線文、基底部の下帯に三列の鋸歯文および平行線文を施すほかは無地である。緑青をふいている。金属の成分分析では、銅78.5%、錫15.1%、鉛2.9%、未同定3.5%で、鉄・亜鉛は未検出とされる。同じくクラン出土やテンベリング (Tembeling) 出土のヘーガー I 式銅鼓と比べ、鉛の含有率がかなり低い一方、錫のそれは相当高い [Linehan 1951 : 9 - 10]。クアラルンプル国立博物館所蔵。

なお、R.O. ウィンステッツ著『マラヤ』のなかで初めて写真入りで公表され、「クランで複数の銅鐘と鉄器がいっしょに発見された」ことが明記されている [Winstedt 1923 : 155]。

⑤クラン＝大英博銅鐘 (図2, 3)

同じくスランゴール州クラン近郊で出土した3個の銅鐘のうちの1つである。高さ56.5cm、底径29.2cmを測る。上記のクアラルンプル博銅鐘と同様に、基底部の下帯に三列の鋸歯文を巡らす。鐘身には鉤形と横S字状の意匠を連結させた装飾を七段にわたって配しており、その各区画内に先の鋸歯文を縦位に添えている。頸部は無地。上述したカンボジア出土のサムロン銅鐘と酷似する。大英博物館所蔵 [Gray 1949 - 50 : 104、Linehan 1951 : 10]。

⑥カンポン＝ペンチュ銅鐘 (図2)

マラヤ南部のジョホール州ムアール (Muar) 郡 Grisek 近郊の^{かみ}上クندان (Kundang Ulu) 村カンポン＝ペンチュ (Pencu) で出土した。高さ58cm、底径32cmを測る。大きさ、文様構成ともに上記クラン＝大英博銅鐘とおよそ同一といえる。鐘の頂部辺りの焼けた粘土を試料とした、オーストラリア国立大学での熱ルミネセンス法による年代測定で、1800BP すなわち紀元後150年という数値が得られた。なお遺跡の発掘により、玉類(ビー

ズ) や土器片が出土している [Adi 1983 : 61]。

4. 考 察

英考古学者 G. de G. シーヴィキングは「マラヤの鉄器時代遺物」のなかで、概ね以下のような見解を述べている。これら銅鐘 (④⑤) の事例はみな、様式分析により初期のドンソン文化に帰属する。ただ、クラン＝クアラルンプル博銅鐘の化学分析が示すところの鉛の含有量 (2.9%) の少なさは、偶然混入した結果ともとれるが、ドンソン文化本場の古いヘーガー I 式銅鼓が10～15%の錫と15～28%の鉛を含む特殊なタイプの青銅でつくられている様相とは異なる面を呈している。ちなみに、ヨーロッパや中東の先史時代の青銅製品は、10%の錫と90%の銅を含有しており、この比率は非常に古い時代から固執されている。したがって、ドンソン文化に属するそうした青銅の製造地はインドシナにあったことが示されよう。マラヤのパハン州テンベリング川出土の銅鼓は、インドシナと類似の金属比率を有し、しかもそれとは別に様式的な根拠によりヘーガー I 式の舶載品とされてきた。しかしながら、すでに存在しているドンソン製品を基にした鋳型を使うことにより、マラヤほかで複製品をつくることは可能である。そのことは、ドンソンの人工品にとどまらず、流浪する鍛冶職人らによって担われた専門化した青銅技術がこの文明の中心から輸出されたことを示唆してもいよう。マラヤに海外から来た金属細工職人が存在していたことは、パハン州において、中国北方遊牧民の文物であるオールドスの青銅ナイフが現れたことによっても暗示されるとした [Sieveking 1962 : 110]。

さらに彼は、1905年にクランでみつかった銅鐘と鉄器の共伴について、両者の共時性が疑問視されたこと [Loewenstein 1962] を踏まえ、博物館にのこる関連する文献や記録を提示しその妥当性を主張している。まず 1) として、クラン出土の4点を数える鉄器の鋳型品がペラ博物館に存在し、それらのラベルやインデックスカードには、各品の受入れ番号や鉄器の模型であること、発見地クラン、1905年スランゴール博物館からの寄贈などの記載がみられる。なお、その4点目には、スランゴール博

博物館にある鉄器の図から作製した鋳型品と付記されてある。2)として、「ペラ博物館年報1906」(JFMSM 2 - 2)の<民族学>の件 (p.89)に、12個の紙型がスランゴールおよびバタン=パダン (Batang Padang) でみつかった4点の鉄器から作製された(計3セット)。うち1セットが大英博物館に、もう1セットがスランゴール博物館に寄贈された、とある。3)として、1955年の時点でペラ博物館に、バタン=パダン出土の鉄器の鋳型品が1つ存在している。したがって、クラン出土と記された4点目の鉄器はのちに寄贈された同地域の別の発見品と目され、この武器は本来の一括埋納に必ずしも伴っていたはずのものではない。ペラ、スランゴールそして大英の各博物館にそれらの鋳型が寄贈されていた以上、推論ながら実物はその所有者に返されたことは明瞭である。4)として、ペラ博物館収蔵品のなかの銅鐘は上述した鉄器群と共伴していたに違いない。そのラベルやカードには、「銅鐘。それはこの場合ほかの2個体および鉄器群とともにみつかった。ほかの銅鐘のうち一方は大英博物館に、他方はスランゴール博物館にある。スランゴールのクランで掘り出された。スランゴール博物館から寄贈、1905年受贈。」とある。5)として、大英博物館にある銅鐘は1938年に至って大英自然史博物館から移管された。それは哺乳類の学芸員補であった Guy Dolman によって、1907年にまず同自然史博物館に寄贈されていたいきさつがある。当時、彼の親類が林務局に雇用されており、多分その人が当の出土品の所有者であったのだろう。二番目の銅鐘 (クラン Sr.) が戦前よりスランゴール博物館にない以上、その所有者が英国へ戻る際に、一連の鉄器およびほかの二つの銅鐘を取り戻したやもしれない(大英博物館の B.Gray からペラ博物館の W.Linehan にもたらされた情報)。

以上引いた証拠から、言及した二つの銅鐘が鉄器と共伴して発見されたことは明らかである。このことは必ずしも、それらの製作年代が同じであったことを意味する訳ではない。それらの銅鐘は戦利品であったかもしれず、あるいはマラヤで在地の集団によって伝世されてきたか、鉄器時代の入植者の故地から搬入されてきたかのいずれかである、魔力をそなえた遺宝であったかもしれない、と捉えている [Sieveking 1962 :

132 - 33]。

さかのぼって、1912～32年にマレー連合州博物館に関係した I.H.N. エヴァンズは、ペラ州南部スンカイ (Sungkai) 地区の鉄器時代に属する石棺墓の発掘概報において、クラン KL 銅鐘 (④) と伴出したとされる関連する鉄器についてすでに言及している [Evans 1828:115]。それによれば、そのうちの1点は、クルイト河岸遺跡 2号石棺墓 [川名 2001] から出土した2点のソケット式長軸鉄斧^{*2}と非常に類似しており、加えて先のクラン出土の鉄器群には長柄のソケット式鉄斧^{*3} - 29cm 長 - も存在する。同じく、クルイト河岸遺跡の1号石棺墓から出土した鉄製の靴形斧^{*4}の併存もマラヤの鉄器時代石棺墓とドンソン文化との共時性ないし系統性の傍証となろう。

マラヤのカンポン=ペンチュ銅鐘に関する、オーストラリア国立大学の P. ベルウッドの私信を評者が伝えている [Adi 1983:61]。すなわち、その絶対年代 (紀元後150年) は上限とみなすべきだとし、銅鐘がこの年代より古くなる見込みが薄いのは、後200年頃に終焉を迎えると思われるベトナムの典型ドンソン期よりも少し遅れるからだとも見ており、ゆえにその銅鐘はヘーガー I 式銅鼓とは共時性をもたないと考えているようである。さらに彼はこう認める。この測定年代はあまり正確ではないが、少なくともこうした銅鐘やフラスコ形青銅器が紀元後1千年紀のベトナム直系でない一つの鑄造伝統に属するという見解に矛盾してはいない。もっともその伝統は、究極的にはベトナム起源の技術に属していたのかもしれない。実際、こうした標品の原型を示すと思われる銅鐘が、かのドンソン遺跡において O. ヤンセによって発掘されている [Bellwood 1985:288]。

さらに雲南の大波那遺跡においても、当該品 (③⑤⑥) にかなり類似した銅鐘がみつまっていることが指摘されている [Bellwood 1985:289]。大理の南東約50km に位置する同遺跡にあって1961年に2基の墓が、1977年に1.5km 離れた別地点で1基の墓が発見された。そこの木棺を試料とした C - 14年代測定では、紀元前566 - 334年という数値が得られており、春秋時代の末頃に属するとみられている [Higham 1996:178]。

その銅鐘は1964年に発掘された、木槨に納められた長さ2mの家形を呈する青銅棺墓に伴う幾多の副葬品の一つである(図3-⑦)。頂上に鈕を有し、鐘身はわずかに内向し、横断面は稜をもった杏仁形をなす。器面には細かい渦巻き文地に蛇形の構成をした雷文をやや斜に六段配し、口縁(基底)部は卷雲文の帯で飾る。高さ48cm、底径26.7cm。なお、銅鐘の成分比率は銅が約80%、錫が16%余、鉛が微量であり、共伴したほかの青銅器と比べると錫の含有率が最多にあたる[雲南省1964]。東南アジア出土の銅鐘と比較すると、まず鈕を具えている点が大きく異なり、大きさはベトナム出土品より大きめでカンボジア・マラヤ出土品よりも一回り小振りといえる。主文様の構成、口縁部の文様帯配置などはベトナム産よりむしろ、カンボジア・マラヤ出土品に類似する様相がみられる。また、大波那遺跡の青銅製品に共通する鉛の含有率の少なさ(2~3%以下)は、後述するようにドンソン文化本場の様相とは異なり、奇しくもマラヤ出土該品(例、クランKL銅鐘)のあり方に近似する。なお、この大波那銅鐘の口縁部文様と青銅棺の壁板に展開された文様とは類似しており、共時性を保証していよう。ところで、ここの副葬品には銅鼓の早期型式にあたるプレ・ヘーガーI式とされる大波那鼓が知られており、紀元前4~5世紀の年代がすでに推考されている[今村1973・1984]。また、雲南の早期銅鼓を検討した量博満も、前5世紀を越えてさかのぼるものではなかろうとしている[量1985]。

なお、同じく雲南にある、滇^{てん}の王族や従者の墓地とされる著名な石寨山古墓群では、前109年、漢の武帝が賜与したものとみられる「滇王之印」金印の出土した第6号墓において、銅鐘に類比すると思われる大銅鈴が銅編鐘6点とともに幾多の副葬品にまじって認められる[雲南省博1959:16-17]。しかしながら、本報告やのちの補遺[雲南省博1964]では、その実測図の記載がみられず実相を知りえていない。

さて、基底部下帯の鋸歯文がカンボジアのサムロン銅鐘(③)では4列、一方マラヤのクラン=大英博銅鐘(⑤)ならびにカンポン=ペンチュ銅鐘(⑥)では3列になっているという違いを除くと、双方は大きさ・器形・文様構成など酷似している。ただ、主文様を仔細にみると、サム

ロン例がZ字基調文であるのに対し、マラヤのクラン＝大英博例およびカンポン＝ペンチュ例はS字基調文となっている。いずれが祖形にあたるのかまだ定かでないが、これらはおそらく、ほぼ同じ頃に同一系統の鍛冶集団によって鑄造され、交易等で財をなした有力者が保有しえた威信財に違いなからう。ベトナムや雲南の出土例と比較すると、基底部横断面が両端に稜をもった杏仁形をなすのに対し、カンボジア・マラヤ出土例は楕円形を呈するという相違点がまず認められる。また文様構成では、中段に横帯を廻らし上半を逆U字形に区画するベトナム産 (①②) よりも、むしろ雲南の大波那例 (⑦) の方により類似する。ただ、大波那銅鐘およびベトナムのヴェトケ銅鐘には懸釣の鈕が付けられている点で相違がある。一方、ベトナム産でもマッソン銅鐘とは頸部風の懸釣装置が共通している。ちなみに、撞座はマッソン例にみられるだけである。

マラヤ出土の銅鐘にも二つの類型がある。大型で鐘身にS字文列を7段配し鋸歯文の下帯を廻らすものと、中型でその下帯と頸部だけ施文し鐘身を無地にするものとのである。今後、南タイやスマトラ方面での類例発見が期待される。

近年、広義ドンソン文化の一列でその水系を領域とするメコン系青銅器文化について、「メコン水系の流通ネットワークが紀元前後の銅鼓移送に関わった航海集団、特にシャム湾からマレー半島沿岸を活動海域とする銅鼓葬集団を介してマレー、インドネシア方面の流通ネットワークと結合していた」状況が説かれている [横倉 1993]。カンボジアのサムロン銅鐘出土地は、良好な漁場であるトンレサップ湖を經由してメコン河口に通ずる内陸水運の要衝とみることができ、またマラヤにおいてはクランもカンポン＝ペンチュも河口から少し入った海峡沿岸の活動拠点と目される地である。そのクランの南30kmほどの同様な立地にあるカンポン＝スンガイランには、墳丘をもった舟棺銅鼓葬墓の存在が知られており、まさに特定型式の銅鐘 (③⑤⑥) の分布も先の見解を支持するあり方を示している。年代が幾分降るおそれがあるが、メコン系扇形青銅斧や水筒 (フラスコ) 形青銅器と同じく、航海集団の活動海域のなかに広く流出していったメコン系青銅器文化の構成要素にこのような銅鐘が

含まれる可能性がある。

ときに、考古資料から知られるドンソン文化の主要な楽器類には、鐘、馬鈴、笙、銅鼓があり、銅鼓上に描かれた文様からも革太鼓、鐘、カスタネットなどの種類の存在が理解できる [ハ・ヴァン・タン 1991]。銅鐘が当時いかなる用途に供されたか確言しえないが、祭儀において荘厳な音響効果をもたらしたであろうことは想像に難くない。

註

- * 1 ラオス鼓については、[松本 1965：図版第 1] に収載されている。
- * 2 [Evans 1928：Pl.XXXVI.a・b] に示され、うち 1 点は、[川名 2001：図 4 - 7] にあたる。
- * 3 [Evans 1928：Pl.XXXIX.b] に示され、これはブラタ河岸遺跡石棺墓出土の同器種 [川名 2001：図 6 - 6] などと酷似する。
- * 4 [Evans 1928：XXXVII.a] に示され、[川名 2001：図 4 - 1] にあたる。

参考文献 (和・洋・中／年月順)

- 松本信広 1965 「古代インドシナ稲作民宗教思想の研究—古銅鼓の文様を通じて見たる—」『インドシナ研究 東南アジア稲作民族文化総合調査報告 (一)』 1 - 160頁 有隣堂出版
- 今村啓爾 1973 「古式銅鼓の変遷と起源」考古学雑誌59— 3 35 - 62頁
1984 「滇西の剣」東京大学文学部考古学研究室研究紀要 3 59-98頁
- 量 博満 1985 「雲南の早期銅鼓」『三上次男博士喜寿記念論文集』考古編 99 - 116頁 平凡社
- 新田栄治 1990 「東南アジアの早期銅鼓とその受容」『乙益重隆先生古稀記念九州上代文化論集』 605 - 20頁 同記念論文集刊行会
- ハ・ヴァン・タン編著 (菊池誠一訳) 1991 『ベトナムの考古文化』六興出版 (原著『考古学の基礎』1975年初版)
- 横倉雅幸 1993 「ドンソンとサーフィン」東南アジア—歴史と文化—22 152 - 72頁
- 肥塚 隆 (編) 2001 『世界美術大全集』東洋編12 (東南アジア) 小学館
- 川名広文 2001 「マラヤ鉄器時代の石棺墓」物質文化70 57 - 70頁
- Evans H.I.N. 1928 On slab-built graves in Perak, *Journal of the Federated Malay States Museums* 12 (5) : 111 - 19.
- Winstedt R.O. 1923 *Malaya*. Constable & Co.Ltd, London.
- Parmentier H. 1932 Notes d'Archéologie Indochinoise, *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 32 : 171 - 82, Hanoi.

- Janse O. 1947 *Archaeological Research in Indo-China. Vol.I* Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- Gray B. 1949 - 50 China or D'ong - Son, *Oriental Art* 2 (3) : 99 - 104, London.
- Linehan W. 1951 Traces of a Bronze Age cultures associated with Iron Age implements in the regions of Klang and the Tembeling, Malaya, *JMBRAS* 24(3) : 1 - 60.
- Sieveking G.de G. 1962(1956) The Iron Age collections of Malaya, *JMBRAS* 29(2) : 79 - 138.
- Loewenstein J. 1962(1956) The origin of the Malayan Metal Age, *JMBRAS* 29(2) : 5 - 78 & Pl.
- Vien Bao Tang Lich Su Viet Nam 1965 *Nhung hien vat tang tru tai Vien Bao Tang Lich Su Viet Nam ve ngoi mo co Viet Khe* (ヴェトケ古墓に関するベトナム歴史博物館所蔵の諸遺物)
- Tweedie M.W.F. 1965 (1970) *Prehistoric Malaya* (3rd edition) . Eastern Univ. Press, Singapore.
- Adi Haji Taha 1983 Recent archaeological discoveries in Peninsular Malaysia 1976 - 1982, *JMBRAS* 56 (1) : 47 - 63.
- Bellwood P. 1985 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Academic Press.
- Higham C. 1996 *The Bronze Age of Southeast Asia*. Cambridge University Press.
- 雲南省博物館 1959『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』文物出版社
- 雲南省博物館 1964「雲南晋寧石寨山古墓群出土銅鉄器補遺」文物1964-12 : 41 - 49.
- 雲南省文物工作隊 1964「雲南祥雲大波那木榔銅棺墓清理報告」考古1964-12 : 607 - 14.
- <雑誌略記>
- JMBRAS : Journal of the Malaysian(Malayan) Branch of the Royal Asiatic Society*

挿図典拠

図1 筆者作成

図2 ① : [肥塚 2001] 口絵 2、③ : [Parmentier 1932] Pl.XI、⑤ : [Linehan 1951] Fig.4、⑥ : [Adi 1983] Pl.11

図3 ① : [Janse 1947] Fig.4、② : [Vien Bao Tang 1965] 図 XXI、③ : [Parmentier 1932] Fig.17、[Loewenstein 1962] Pl.3、④ : [Loewenstein 1962] Pl.5、⑤ : [Tweedie 1965] Fig.20、⑦ : [雲南省文物 1964] 図九